

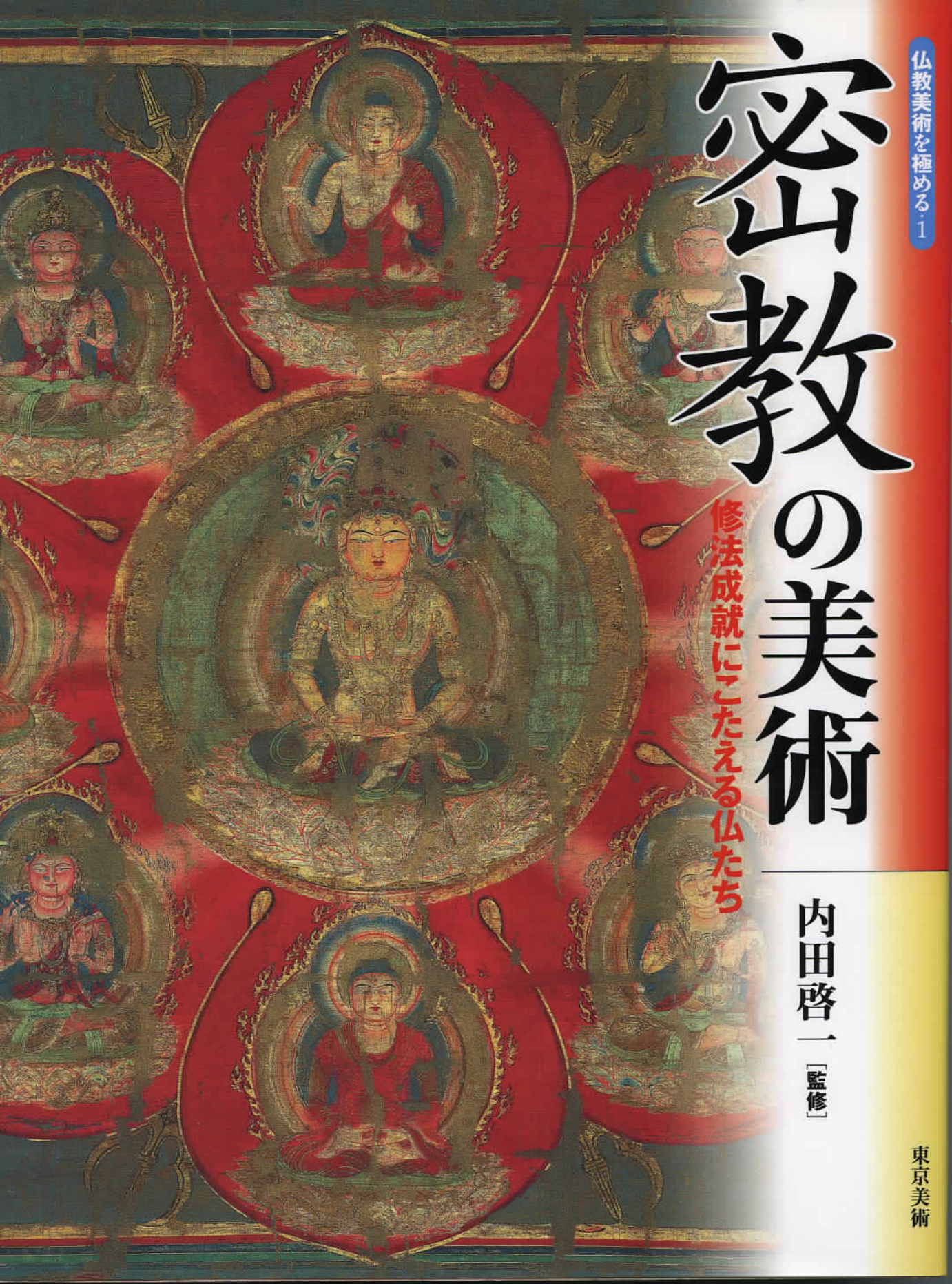
仏教美術を極める 1

密教の美術

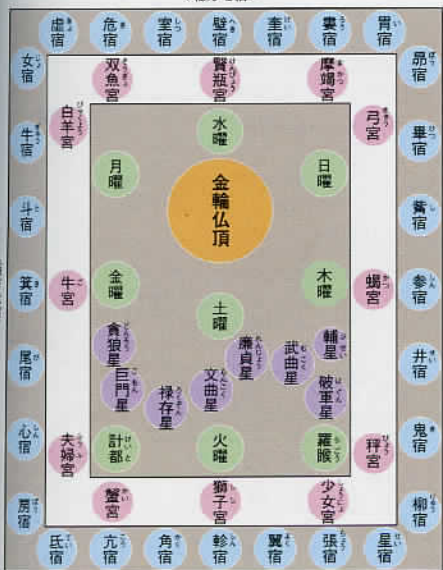
修法成就にこたえる仏たち

内田啓一 [監修]

東京美術



〈北方七宿〉



〈南方七宿〉

■ 北斗七星 ■ 九曜
■ 十二宮 ■ 二十八宿

延命法

◆増益法に分類される長寿祈願の修法

自らの運命を左右する延命も、人々にとつては重要な関心事であった。生前の運命と死後の運命もある。密教が隆盛していたころ、病は宿業といつて前世の報いであつたり、悪霊・怨霊によるものと想定されていた。「病草子」が仏教絵巻であるのも、因果応報のなかで考えられたからだ。寿命も人の計り知れないところで決定されるものと思われていた。人々の不安をとり除くために、延命法は最適な方法だったのである。

○北斗曼荼羅の構成

中心の金輪仏頂は北極星を神格化した尊で、その回りに北斗七星と九曜を配し、北天の景観をあらわす。第二院の十二宮は太陽の運行に、第三院の二十八宿は月の運行にちなんだものである。

※十二宮と現在の星座との対応は以下のとおり

双鱼宮：魚座	蟹宮：蟹座	蝎宮：蠍座
白羊宮：牡羊座	獅子宮：獅子座	弓宮：射手座
牛宮：牡牛座	少女宮：乙女座	摩竭宮：山羊座
夫婦宮：双子座	秤宮：天秤座	賢瓶宮：水瓶座

病を治し、寿命を延ばす延命法は基本的には増益法のひとつであり、東方に向かつて本尊を奉懸し、黄色の衣を着し、壇は方形とすることは同じである。だが、屈蕤草を加持し、方形の炉外に甲冑形を描いて用いるという。

貴顕なる人が病気になる、息災法が修される場合もあったが、回復してのちも健勝であることを願う延命法がしばしばあてられた。延命法に用いられるのは、薬師法、普賢延命法、北斗法、閻魔天法などである。いずれも寿命を左右する尊格であり、自らの延命を切願した修法であつた。

延命法では、このうち普賢延命菩薩を本尊とする場合が多かつた。普賢菩薩は奈良仏教においても釈迦の脇侍としてよく知られ、平安時代には法華経信仰のもと多く造像された尊格である。その普賢菩薩が増益延命の三昧に住した姿が普賢延命菩薩である。

普賢菩薩の像容は白象に乗った二臂の姿にあらわされ、合掌形や如意等を持つ。それに対し、普賢延命菩薩になると、二臂であつても金剛薩埵と同じく金剛杵と金剛鈴を持し、白象も三頭になるなど、密教化が図られている。また、臂数も増え、二十臂の普賢延命菩薩も描かれている。



○北斗曼荼羅 | ほくとまんだら

北斗曼荼羅には円形と方形の2種類がある。円形は天台の慶円が相承し、方形は仁和寺寛助が相伝したと伝えるが、多く流布したのは方形である。久米田寺本はその最も古い作例。中央の金輪頂こそ平安時代末期の典型的な如来像の描法を示すが、北斗七星をはじめ月輪内の諸尊は自由闊達な筆づかいで、しかも細部まで神経の行き届いたものである。

大阪・久米田寺 重文 絹本着色 1幅 165.2×133.0cm 平安時代

◆天と地に坐し、延命を司る尊格たち

北斗法も延命法に用いられる。基本的には除災祈願のために修されるのが北斗法で、北斗供とも称されるが、院政期には個人的な息災延命のために盛んに修された。北斗法の中心尊は北極星を尊格化した金輪仏頂尊で、その回りに北斗七星が配される。北極星は北天にあつて不動の星であり、他のすべての星が北極星の周囲を回転する。天体の中心が北極星と考えられたのは当然であろう。これに密教の尊格で最高最勝である金輪仏頂尊があてられた。北極星が人間の運命を左右すると考えられたのである。

北斗曼荼羅は金輪仏頂尊を中心に、北斗七星と九曜星、十二宮、二十八宿を配する。すべて天体の星を尊格化したもので、九曜は、日、月、火、水、木、金、土と、現在も単位となつている一週間と、それに計都、羅睺という空想上の星を加えたものである。ついで十二宮だが、現在でも星座占いとして知られている蠍座や蟹座などに対応した星が十二種配される。西洋占星術では誕生日によつて星座が決定するが、密教においても、属星といつて



生年によつて星が決まる本命星の思想があつた。さらに本命日という自らが属する日があり、北斗法は本命日に修される場合が多い。二十八宿は月の満ち欠けでも馴染みの月の周期(月齢)を四分割して配したものである。平安時代には、占星を専門とする宿曜師や、あるいは陰陽師もこれら延命に関わる修法に密教僧とともにかかわつてきた。このことから、延命法が平安貴族社会の重要な関心事であつたことがわかる。

北斗法が天であるなら、対するは地である。閻魔天を中心尊とする閻魔天曼荼羅も延命法の本尊である。閻魔天は中世以降になると、地獄の冥官として畏怖される存在となるが、密教では水牛に乗つた菩薩形であらわされる。ただ、人頭幢といつて人間の頭が先端についた棒を持つ点が、やがて冥界の主となることを予想させる。

閻魔天曼荼羅では、閻魔天の周囲に閻魔后と閻魔妃という閻魔の母親と妻も配され、一家で修法者を見守つていくかのようだ。さらに茶枳尼天和遮文陀といった冥界の諸尊のほか、五道大神、泰山府君など中国道教の冥界諸神も描かれる。ここで気づくことは、この曼荼羅はインドではなく中国成立であることだろう。道教の不老不死の思想や西王母と不老長寿などの関係でもわかるように、人間の寿命を延ばす延命祈願は中国人の切なる願いなのであつた。



◎童子経曼荼羅の構成

異様な姿の乾闥婆を中心に十五鬼や訶梨帝母が配される。鬼神はいずれも童子に災いをもたらすと考えられていた。

- [十五鬼] ①弥伽迦(牛) ②迦王(獅子) ③鶩陀(鳩摩羅天) ④阿婆悉摩羅(野狐) ⑤牟致迦(獼猴) ⑥摩致迦(羅刹女) ⑦閻弥迦(馬) ⑧迦弥尼(婦女) ⑨梨婆抵(狗) ⑩富多那(猪) ⑪曼荼羅提(猫兒) ⑫舍究尼(鳥) ⑬捷吒婆尼(雉) ⑭目佉曼荼(狐) ⑮藍婆(蛇)

◎童子経曼荼羅 どうじきょうまんだら

中央の乾闥婆は獅子冠をかぶり、左足を垂れて岩座に坐し、左手は膝にあて、右手には先端に十五鬼の首を貫いた三叉戟を持つ。青や赤、緑、黄などの明快な色彩が、異様さを増幅させるかのようである。乾闥婆に施された、やや大雑把な文様や、十五鬼や童子の姿が稚拙である点など室町仏画の特徴を示すが、それがかえってこの曼荼羅をユニークな作風に仕立て上げている。

京都・東寺 絹本着色 1幅 85.5×38.7cm
室町時代

密教尊といっても、インドからの比較的直接的な像容と中国で咀嚼された造型があるが、閻魔天は後者の典型的な例である。

延命法の最後に、童子経法をあげておきたい。その名のとおり、幼児の長寿を願う修法で、乾闥婆を主尊とする童子経曼荼羅が用いられる。幼児の成長率が著しく低かった時代にあつて、童子経法もまた、人々の切望に応えての延命法であつた。